

Hats off to the past, Coats off to the future.

西南学院グリークラブ創立100周年記念 『グリークラブフェスティバル』へのお誘い

西南学院グリークラブ
西南学院グリークラブ OB 会

1919(大正8)年の誕生以来戦中、戦後と激動の時代、ひたむきに歌い続け、ファンの皆さんに応援をいただいていた西南学院グリークラブは、おかげさまで2019年に100歳を迎えることになりました。「歌と仲間」を愛するDNAを大切に、それぞれの4年間を繋いできた仲間は1000名を超えます。また、2006年に部員が0になりましたグリークラブも、2008年の復活以来少人数ながらも自立した活動を始め、新たな歴史を刻み始めております。

そこで、Hats off to the past, Coats off to the future. (過去に敬意を表し、未来に向かい努力をしよう)のスローガンに思いを込め、現役とOBが一同に集結し、記念演奏会及びフェスティバルを下記概要にて開催いたします。101年の幕開けでもあります親睦の場が、西南グリーの更なる発展に繋がりますよう、より多くのOBの皆様の参加をお願いします。

記

■開催日 2019年9月22日(日)

■会場 アクロス福岡シンフォニーホール

■記念コンサート&フェスティバル

第1部 西南シャントウール創立65周年記念・第42回定期演奏会 13:00～15:00

★客演指揮者 小久保 大輔 (有料/全席指定)

東京音楽学校器楽科卒業。指揮を桐田正章、汐澤安彦の各氏に師事。

現在、ガレリアウインドオーケストラ音楽監督・常任指揮者、

マルチナショナルプラスアンサンブル音楽監督他。故福永陽一郎氏のお孫さん。

賛助出演 西南グリーOB メンバーズ

第2部 西南学院グリークラブフェスティバル 16:30～18:30
世代別ステージ(卒年10年単位) (無料)

合同ステージ「月光とピエロ」

★客演指揮者 小久保 大輔

■祝賀パーティー 19:00～21:00

会場 天神スカイホール(西日本新聞会館)アクロスより徒歩7分

■参加費用 フェスティバル参加者 5,000円

祝賀パーティー参加者 5,000円

1. これまでの経緯と今後の進め方

2017年度より、常任幹事と各卒年毎の学年幹事に加え、この企画の実行を担当する実行委員を交えて、フェスティバルの詳細を詰めてまいりました。シャントウールの定期演奏会と同時開催する初めての試みでもありますが、遠隔地在住 OB、若手 OB の皆様の意見も参考にさせていただき、参加しやすい、練習しやすい場作りを目指すことにしました。

世代別ステージは、90 周年記念フェスティバルで参加の大きなきっかけになりましたので、今回も踏襲することにしました。あれから 10 年、選曲や演奏スタイルにも世代ごとの特色が色濃く表れるのではと期待しています。10 月に行いました学年幹事会で世代別の指揮者候補が決定しましたので、演奏曲目についての協議を早急に行い決定次第皆様に連絡することになります。

2. 参加費用と参加申し込みについて

(1) 参加費用

- ・フェスティバル参加者 5,000 円(会場費、通信費、印刷製本費、事務費等)
- ・祝賀パーティー参加者 5,000 円(会場費、料理・飲料代)

(2) 参加申し込み方(フェスタ当日まで、申し込みの確認を 2 回行います)

①一次申し込み

- ・このご案内に同封の参加申し込み書(官製はがき)を、2019 年 1 月末日までにご提出ください。事務局では一次申し込み確認の人数で先ずは準備を進めます。
- ・世代別の参加推進は、主に「学年幹事」が実行委員とともに行いますのでご協力下さい。
- ・一次申し込み者には、世代別演奏曲の楽譜及び練習日程等を後日お届けします。

②二次申し込み(最終確認)

- ・一次申し込み者全てに対して、最終の参加確認を行います。同時に、一次確認の折参加決定を留保されていた方、不参加回答をされていた方、の追加及び変更の申し込みも受け付けます。
- ・二次確認の時期は概ね 2019 年 3～4 月頃を予定しています。

『あいつ、今何してるかな』

卒業以来疎遠になっている同期の方がいましたら、この機会に声を掛け合いご参加ください。フェスタ開催日の前日、翌日も同期の集まりが可能になるよう、3 連休の中日で日程を組みました。あの時會っておけば.....のないよう、この機会を是非ご利用下さい。

付属資料

1. 常任幹事、学年幹事及びフェスティバル実行委員名簿
2. グリークラブ 100 年の歩み(概略)

OB 会の HP に、昭和 35 年に発刊された創立 40 周年記念誌「40 年の歩み」をデータ化しました。当時は発刊部数も少なく貴重な資料になっていますのでご覧になってください。

グリークラブ 100年の歩み(概略)

1. 1919(大正 8)年～1944(昭和 19)年

当初は学院のチャペルサービスを行うため「歌」好きの生徒 10 数名がミス・フルジュムの下に集まったといわれています。器楽部と活動を共にしていましたが、昭和に入り器楽部は音楽部、合唱部はグリークラブとして独立した存在となり、1934(昭和 9)年には第 1 回定期演奏会を開催するまでになります。しかし、世の中の機運は軍国調の色彩が濃くなり、学徒動員が発令された 1943(昭和 18)年の第 9 回定期演奏会「涙のコンサート」をもってその活動を中断せざるを得なくなります。

2. 1945(昭和 20)年～1968(昭和 43)年

出征先から復員してきた部員も加えクラブは再興されますが、瓦礫と焦土の街での復活活動の大変さは想像に難くありません。幸いにも福岡の地に復員をしていた石丸 寛氏から指導を受けるようになり、1947(昭和 22)年の朝日合唱コンクールに初出場し優勝を果たします。その後大学の部が独立した「全日本合唱コンクール」に通算 18 回出場し、西部地区では 16 回優勝、全国大会においても 3 位以内の入賞 5 回という輝かしい成績を収めました。1968(昭和 43)年をもってコンクール出場を止め、以降は独自の演奏活動に力を注ぎます。

1954(昭和 29)年にはOBで形成された男声合唱団「西南シャントウール」が誕生します。

《1945～1968 年定期演奏会の演奏曲》 仲間とハモった曲見つかりましたか？

黒人霊歌、月光とピエロ(清水脩)、冬のセレナーデ(サンサーンス)、ロシア民謡、ドイツ合唱曲、イギリス民謡、ミサ曲(グノー)、中世聖歌集、日本民謡、家路(ドボルザーク)、フォスターアルバム、アメリカ民謡、富士山(多田武彦)、Five Sea Chanties、中勘助の詩から(多田武彦)、Missa Mater Patris(Josquin Des Prez)、バルトーク作品集森脇憲三作品集、日本の笛(平井康三郎)、Student Prince(ミュージカル)、宗教曲(デュオパ)、My Fair Lady(ミュージカル)、Missa Brevis、村の人気者(森脇憲三)、さむい晩(森脇憲三)、Second Massa in G(グノー)、智恵子抄巻末のうた六首(清水脩)、蛙の歌(南弘明)、ジプシーの歌(福永陽一郎編曲)、Requiem(ケルビーニ)、日本童謡集(福永陽一郎編曲)、アイヌのウポポ(清水脩)、Mary Poppins(ミュージカル)、Messe Solennelle(デュオパ)、合唱による風土記-阿波(三木稔)、シューベルト作品集、フランス民謡集(福永陽一郎編曲)

3. 1969(昭和 44)年～2005(平成 17)年

1959(昭和 34)年の創立 40 周年記念演奏会で、福永陽一郎氏に客演指揮をお願いして以来、畑中良輔氏、関屋晋氏にも度々客演指揮をしていただきました。特に、福永陽一郎氏には亡くなられる前年まで、通算 22 回もの定期演奏会で熱血指導をいただきました。

1969(昭和 44)年には 50 周年記念として初めての関西・関東公演を行っています。1990 年代には 100 名を超える部員を擁し、定期演奏会はもとより、関西学院や同志社大学グリークラブとの交歓演奏会、国内各地での演奏旅行、数度に渡る海外演奏旅行(アメリカ、ヨーロッパ、韓国)を通して国際親善にも貢献しています。2000 年代初めより、大学男声合唱団の全国的な傾向とはいえ、西南グリーも徐々に部員が減少し、2006(平成 18)年には遂に部員 0 名という創部以来最大の危機に直面しました。

《1969～2005 年定期演奏会の演奏曲》 仲間とハモった曲見つかりましたか？

ロバートショウアルバム、木下夕爾の三つの歌(清水脩)、清水脩作品集、海(高田三郎)、
さすらう若人の歌(福永陽一郎編曲)、イギリス民謡集(福永陽一郎編曲)、雨(多田武彦)、
Missa Brevis(Lemachen)、The Seven Beetles Numbers(宮島将郎編曲)、
Messe No2.en Sol Majeur(グノー)、Simon and Garfunkel(福永陽一郎編曲)、柳河風俗詩(多田武彦)、
日本の笛(福永陽一郎編曲)、愛の歌(ブラームス)、聖チェチリアのための荘厳ミサ(福永陽一郎編曲)、
中勘助の詩から(多田武彦)、海の構図(福永陽一郎編曲)、月光とピエロ(清水脩)、
三声のためのミサ(W・バード)、草野心平の詩から(多田武彦)、島よ(大仲恩)、
南太平洋(ミュージカル・福永陽一郎編曲)、古典イタリア歌曲集(福永陽一郎編曲)、
水のいのち(高田三郎)、Glee Club Favorites、沙羅(福永陽一郎編曲)、Sea Chanties(Donghenty 編曲)、
ゆうやけの歌(湯山昭)、Ein Deutsches Messe(福永陽一郎編曲)、雪と花火(多田武彦)、
雪明りの路(多田武彦)、Man of La Mancha(福永陽一郎編曲)、 Negro Spirituals(福永陽一郎編曲)、
日本民謡、月下の一群(南弘明)、イタリア民謡集(福永陽一郎編曲)、世界民謡集、海鳥の詩(広瀬量平)、
The Student Prince(北村協一編曲)、Sea Shanties、Marry Widow(福永陽一郎編曲)
尾崎喜八の詩から(多田武彦)、吹雪の街を(多田武彦)、9つのフランス民謡(福永陽一郎編曲)
New Moon(ミュージカル・福永陽一郎編曲)、三崎の歌(多田武彦)、レクイエム(三木稔)
Zigeunermelodien(福永陽一郎編曲)、マザーグースの歌より(青島広志)、北斗の海(多田武彦)、
祈りの虹(新実徳英)、ディズニー名曲集(源田俊一郎)、アメリカ民謡集(ロバートショウ)、
島よ(福永陽一郎編曲)、シューベルト男声合唱曲集、富士山(多田武彦)、三つの時刻(三善晃)
ドイツ・リーダー・ターフェル・フェラインのリーダーシャツ名曲集、On Broadway、
The Western Nostalgia(福永陽一郎編曲)、Missa Tempore Belli-Messe in Notzeiten、
季節へのまなざし(荻久保和明)、アイヌのウポポ(清水脩)、ことばあそびうた II(新実徳英)、
Old Folk Tunes of British(福永陽一郎編曲)、チャイコフスキー歌曲集(福永陽一郎編曲)、
過ぎ去りし少年時代(木下牧子)、トスティ歌曲集(北村協一編曲)、真夜中(木下牧子)、
中原中也の詩から(多田武彦)、Francis Poulenc GLORIA より(完戸真人編曲)、
夢の肖像(須田和宏編曲)、二つの新しい男声合唱曲(新実徳英)、若人の歌(佐藤眞)、
リヒャルトシュトラウス歌曲集(福永陽一郎編曲)、かみさまへのてがみ(高嶋みどり)、
オクラホマ(源田俊一郎編曲)、さだまさしアルバム(完戸真人編曲)、森と狩りの歌、雪国にて(多田武彦)、
Liedeslieder-Walzer(荒谷俊治編曲)、縄文愛(荻久保和明)、オペラ座の怪人(完戸真人編曲)、
アーン歌曲集(北村協一編曲)、美女と野獣(完戸真人編曲)、風に鳴る笛(高嶋みどり)、
West Side Story(完戸真人編曲)、レ・ミゼラブル(完戸真人編曲)、Old American Songs(A.Copland)、
井上陽水の世界(源田俊一郎編曲)、回転木馬(完戸真人編曲)、白いうた青いうた(新実徳英)、
My Fair Lady(完戸真人編曲)、Six Choruses(G.Holst)、宗教合唱曲集(完戸真人編曲)、
Mary Poppins(完戸真人編曲)、日本の唱歌(野口龍太郎編曲)、
温もりを忘れない(福永陽一郎・今川晋祐編曲)

4. 2006(平成 18)年～

ここで、戦前戦後の苦難を乗り越えきた OB 達が、クラブの再興支援に立ちあがります。2006(平成 18)年には、長年、西南グリーの練習場として、悲しみの時も喜びの時も共に歌声を響かせてきた大学のランキン・チャペルが新チャペル建設のため解体されることになり、それに伴い開催された『ありがとうランキン・チャペル』の催しに、全国各地から OB 約 250 名が参集し西南サウンドを響かせました。そして、3 年後の 2009(平成 21)年には『創立 90 周年記念グリークラブフェスティバル』が開催され、新装なったチャペルに 270 名の歌声が再び響き渡りました。10 年単位の年代別・現役とOB有志・東京OB会・西南シャントゥール・そして最後は全員合同の演奏と感動の 3 時間でした。この演奏会を機会に、OB 合唱団「西南シャントゥール」に続き、「西南グリー東京 OB 会」と「西南グリーOB メンバーズ」という 2 つの合唱団活動に火が付き現在に至っています。

この様な活動が回り回ってクラブの復興に繋がったのか、2008(平成 20)年待望の新入部員 5 名が入部し、復活グリーとしての活動がスタートしました。2011(平成 23)年には 2006(平成 18)年以来中断していた定期演奏会(第 55 回)が開催されるまでになりました。まだまだ満足できる部員数には至っておりませんが、歌好きの若者たちが力強く活動しています。

《2006 年～定期演奏会の演奏曲》 仲間とハモった曲見つかりましたか？

イギリス民謡集、尾崎喜八の詩から(多田武彦)、J-POP Selection、Jaz & Standard、
ナポリ民謡(内海敬三編曲)、歌は世につれ、世は歌につれ(丸山愛埜編曲)、
ふるさとの四季(源田俊一郎編曲)、酒の歌(源田俊一郎編曲)、唱歌の四季(三善晃)、
白いうた青いうた(新実徳英)、思い出(多田武彦)、Christmas Carol(福永陽一郎編曲)

5. Hats off to the past, Coats off to the future.

クラブ発足から 16 年、グリークラブとして独り立ちができるようになった 1935(昭和10)年頃から戦局が激しくなり、官憲の目は米人教授を擁する学院に対してもうるさく、遂にはプログラムの内容にも干渉するようになりました。当時のグリーメンにとって最大の痛手は楽譜の入手で、敵国の歌と称され困難になりましたが、藤井泰一郎氏(グリークラブ部長、後に文学部教授)による「The Song of Soldiers」の日本語訳「いざ起て、戦人よ」が、西南グリーの愛唱歌として戦争中も歌い継がれました。現在ネット上では「正体不明の定番曲」とも言われていますが、じつは、西南グリーと最も縁の深い曲なのです。しかし、1943(昭和 18)年の学徒動員発令により出征した多くのグリーメンは、学業半ばにして大陸に、南の島に若い命を散らしました。戦争を知る世代が少なくなってきましたが、所属したクラブの歴史を通して、今一度、戦争の悲惨さと平和の尊さを後世に伝えていかねばならないと思います。参加 OB の皆様と客席のお客様が一緒に歌う「いざ起て、戦人よ」が、そのきっかけになることを願ってやみません。一人でも多くの OB の皆様の参加をお待ちしております。

2018年11月吉日

西南学院グリークラブ創立100周年記念
グリークラブフェスティバル実行委員会